

「のだ」文とテキスト構造

—内容区分とまとまりに関連して—

俵 山 雄 司

1 はじめに

文末形式「のだ」を扱った研究において、文末形式「のだ」¹が付与された文（以下、「のだ」文）が段落の末尾にあらわれやすいという傾向が指摘されている²。

- (1) 日本人はこれまでボランティア活動がすくない、と批判されてきた。たとえば、海外に進出した工場の従業員は、自分たちだけで固まって、地域ではなんにもしない、との批判が強かった。確かに会社人間で、会社の仕事だけで精いっぱい、地域に出てなにかをする、という習慣がなかったため、外国で思わぬ批判を受けるようになったのである。(現代)

「のだ」文が段落の末尾にあらわれるという現象は、それがテキストの内容的な区切り目となっていると捉えなおすことができる³。本稿では、実験的な調査でえられたデータにもとづき、テキストの読み手の観点から、内容的な区切り目と認識されやすい「のだ」文とはどのような環境にあらわれ、またどのような特徴を持つのかについて考察する。

2 先行研究と問題点

「のだ」文が段落の末尾に出現しやすいことの理由について言及している研究に霜崎(1981)と石黒(2004)がある。

霜崎(1981)は森鷗外『雁』の第1章を対象として計量的な調査を行い、「のだ」を述語末に持つ文は文総数の11.3%でしかなくにもかかわらず、44.3%の「のだ」文が段落の末尾にあらわれていると指摘している。そして、この段落終結率の高さの理由を、「のだ」の持つ「先行する文の意味の補足・説明、理由の提出、根拠の提示などの機能」に求めている。たしかに霜崎(1981)の挙げた以下の例では「のだ」文が、先行文の補足・説明といった役割を担っているようにみえる。

- (2) 或る時は大学の中を抜けて赤門に出る。鉄門は早く鎖れるので、患者の出入す

だが、上記の説明は、「のだ」が段落の先頭に来にくいということの理由にはなっても、段落の最後尾にあらわれやすいことの直接の理由とは言えない。

一方、石黒 (2004) は、「のだ」文が段落の末尾に来やすいのは、「のだ」が「先行文脈の内容をまとめ、そこまでがひとまとまりの文脈である」ことを示すはたらきを持っているからだとしている。さらに、このことを「のだ」が持つ機能、すなわち先行文脈において不十分だった認識を充分なものとするということに関連づけている。石黒 (2004) のこの指摘は表現技術指導の立場からのものであり、直感的にはよく理解できるものである。しかし、それでもなお以下のような疑問が残る。

「のだ」の本質的な機能を説明の根拠としているため、拡大解釈をすれば、すべての「のだ」が同様に段落末尾に出現しやすい性質を帯びているということになってしまう。「のだ」の中でも特にどのようなものが段落末尾に出現しやすいのかを特定できないだろうか。

次節以降では、まずテキストの内容的な区切り目の認定に関する調査の結果を紹介し、その分析を出発点にこの問題に対する考えを提示する。

3 テキストの読み手による区切り目の認識についての調査

3.1 調査の方法

テキストの内容的な区切り目と「のだ」文との関係について考えるのに、テキストの書き手による改行一字下げの段落区分を基準にしたのでは客観性の点で限界がある⁴。これは、改行一字下げによる書き手の段落区分が「分量的な均衡の配慮」(塚原 (1966))、「リズムや読みやすさ」(二通・佐藤 (2001)) などの理由でもちいられる場合もあり、かならずしもテキストの内容的なまとまりを意味しないからである。よって、ここでは複数の読み手を対象とした実験的調査によってテキストの内容的な区切り目の認定を行い、その結果をもって分析対象とする。

調査は以下のような手順で行なった。まず、改行一字下げによる段落区分をすべて取り除いたテキスト (稿末資料 1 を参照) を用意し、被験者に読んでもらう。その後、文章の形で与えられた指示 (稿末資料 2 を参照) に従い、それぞれが読みとった内容的なまとまりにもとづいてテキストに直接区切り目を記入してもらった。区切り目は回数を制限せず、いくつ区切り目を記入しても可能とした。ここでえられた区切り目のうち、被験者 18 人⁵の半数以上が区切った箇所をこのテキストの内容的な区切り目として認定することとする。

調査に用いたテキストは、中学 1 年の国語教科書所収の「クジラの飲み水」という説

明文である。このテキストは44の文、11の形式段落から構成されている。これを採用したのは、44文中13文と「のだ」文が非常に多くもちいられていること、そして、内容が平易で「のだ」文と先行文脈との論理関係が読みとりやすく分析が容易であると考えたからである。

3.2 調査結果

表1は読み手が、テキスト文の番号とその文の後ろを区切り目と認識した被験者の人数とをあらわしたものである。なお、区切り目と認識した人が1人もいなかった文に関しては、人数の欄に「*」が入れている。

表1 テキストに区切り目を入れた人数

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人数	*	1	14	3	*	10	12	1	*	*	7	*	*	*	11
番号	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
人数	*	*	18	*	1	2	*	1	*	*	17	1	*	*	*
番号	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	
人数	*	2	*	1	12	*	3	*	*	*	*	13	3	*	

上段囲み数字…「のだ」文、下段太数字…半数以上が区切り目を入れた箇所
太線…元のテキストでの形式段落の境界

以下に半数以上が区切り目と感じた箇所と感じなかった箇所とをそれぞれまとめて示す。なお、半数以上が区切り目と感じた箇所で文末形式が「のだ」以外だったものについては、その形式を（ ）内に示しておく。

半数以上が区切り目と感じた箇所

3、6、7 (のであろうか) 15、18、26 (ている)、35 (ている)、42

半数以上が区切り目と感じなかった箇所

1、2、4、5、8、9、10、11、12、13、14、16、17、19、20、21、22、23、24、25、27、28、29、30、31、32、33、34、36、37、38、39、40、41、43、44⁶

ここで注目してほしいのは、表1の太線の数(元のテキストでの形式段落の境界)と人数の欄の太数字(半数以上が区切り目と感じた箇所)が完全には対応していないことである。具体的に言うと、文番号3・7・15・18・26・35・42は書き手の段落設定と読み手の内容区分が一致している。しかし、書き手がそこで段落を区切った文番号11・21・37は話し手にとっては区切り目と認定されず、一方で、読み手が区切り目と感じた文番

号6は元のテキストでは段落の末尾とはなっていない。

4 区切り目認識と「のだ」文の出現環境

4.1 区切り目と認識された「のだ」文の出現環境

今回の調査テキストにおいて読み手が区切り目と認識した「のだ」文は5カ所あった。その出現環境を詳しく観察してみると、「のだ」文が先行文脈に存在する疑問への解答になっているという特徴がみられた⁷。これには次のような2つの下位タイプが存在する。

- I 先行文脈で疑問が言語化して示されている (文15・18)
- II 先行文脈で読み手に疑問を想起させるような叙述がなされている (文3・6・42)

前者では疑問が明示されていると考え、後者は疑問が暗示的に示されているというふうに捉えることができる。以下では、それぞれのタイプについて調査に使用したテキストの該当箇所を示しながら解説を加えていく。

4.1.1 先行文脈で疑問が言語化して示されている場合

先行文脈で疑問が言語化されているのは、調査テキストの文15・18の「のだ」文である。

- (3) 12. では、クジラは海での生活に適応したため、塩分の濃い海水を飲むことができるようになったのだろうか。
- 13. たしかにクジラの体は、海という環境に適応していろいろな変化をしたが、海水を淡水に変えるような体の働きは備わっていない。
- 14. つまり、飲み水に関しては陸にすむほ乳類とほとんど変わらない。
- 15. このため、クジラも海水を飲んでのどのかわきをいやすことはできないのである。

上記では「のだ」文である文15に対応する疑問文は先行する文12である。両者の間には文13・14という2つの文が存在しているが、文13では文15で示される解答の前提となる知識（「海水を淡水に変えるような体の働きは備わっていない」）、次の文14ではそれが意味するところ（「飲み水に関しては陸にすむほ乳類とほとんど変わらない」）の提示が行なわれている。つまり、この文13・14は次に来る解答を読み手にスムーズに理解してもらうための前提を準備しているものである。

この「疑問—解答」の構造を解答の前提も踏まえた形で取り出すと以下ようになる。

- (4) 疑問：クジラは海での生活に適応したため、海水を飲むことができるように

なったのだろうか（文 12）

解答：いや、海水を淡水に変えるような体の働きは備わっておらず（文 13）、
飲み水に関してはほ乳類とかわらないため（文 14）、クジラも海水を飲
んでのどのかわきをいやすことはできないのだ（文 15）。

以下の文 18 の箇所も上記と同様に、「のだ」文を解答とする疑問表現が先行文脈中に
ある例である。

- (5) 16. それでは、食物を食べる時にいっしょに飲み込まれる海水は平気なのか、
という疑問を持つ人もいるだろう。
17. ところが、食物を食べる時には、海水はほとんど胃の中に入ることはない
のである。
18. 例えば、シロナガスクジラの場合は、口の中にあるヒゲのような器官を
使って、口を閉じたまま海水だけをヒゲのすき間から外に流し出してしま
うのだ。

ここでは文 16 の中で提起された疑問に対して、文 17 で概略的な答えが先に出され、
文 18 その概略的な答えの理由が「シロナガスクジラ」の例を挙げながら示されている。
つまり、文 17 と文 18 とが合わさって、文 16 の解答を構成していると考えることができ
る。

なお、ここでは概略的な答えを提出している文 17 の文末にも「のだ」が付されている
が、ここは読み手には区切り目と認識されなかった。それは、解答は文 18 まで連続して
おり、当然解答を述べ終わった文 18 のほうが区切り目と認識されやすかったからだと
考えられる。

4.1.2 先行文脈で読み手に疑問を想起させるような叙述がなされている場合

前節で挙げた 2 つの例はともに、先行文脈に疑問が言語表現として明示されていた
が、文 3・6・42 の部分では先行文脈中の読み手に疑問を想起させるような叙述によっ
て、疑問が暗示されている⁸。

- (6) 1. 「海には水が不足している。」と言ったら、ほとんどの人はそんなことがあ
るわけがないと思うだろう。
2. もちろん海水の大部分は水であるし、海が大きな水のかたまりであること
は確かである。
3. しかし、膨大な水によって作られている海は、人間の飲み水という面から
みると、砂漠と同じかそれ以上に水が乏しい環境なのである。

これは調査テキスト冒頭の部分であるが、「海には水が不足している」という叙述が、読み手に疑問を想起させるものと解釈される。この叙述は我々が「海」に対して常識的に抱いている観念に反しているため、読み手が「なぜそのようなことが言えるのか」という疑問を抱くことが予想される。そして、その疑問に対する答えは、文3で「のだ」文の形をとって提示されることになる。間に挟まれている文2は「もちろん……は確かである」という譲歩の文であり、読み手の常識を確認しながら文3で示される解答の導入をしていると考えられる。

文6・文42の場合もこの文3と同じように解釈することが可能である。これ以降の例では、疑問と解答との対応をわかりやすくするため、先行文脈から想起された疑問を、その元となる叙述の後に括弧に入れて示す。

- (7) 4. 海にすむほ乳類であるクジラにとって、飲み水をどのようにして得るかということは非常に大きな問題となる。 [疑問：なぜ大きな問題となるのか]
5. 動物はふつう、体重の約七〇パーセントが水分であり、そのうちの一〇パーセントの水分を失うと生命がおびやかされる。
6. 生物にとって水はそれほどたいせつなものなのである。
- (8) 38. 陸上の動物の場合、体の水分が失われる大きな要因としては、呼吸・発汗・排せつの三つがある。
39. だが、海洋では水蒸気が比較的多く、湿度が非常に高いので、呼吸によって失われる水分の量はきわめて少ない。
40. また、クジラには汗腺がないため、汗によって水分が失われることはない。
41. したがって、クジラの場合、貴重な水分は主に排せつによって失われることになる。 [疑問：なぜ貴重な水分を排出してしまうのか]
42. これはもったいない話のように思えるけれども、尿を出すことは、同時に体内の余分な塩分を、老廃物といっしょに排出することになっているのである。

まず、(7)では、文4から想起される「なぜ大きな問題となるのか」という疑問に対する解答が文5と文6で与えられている。文6は文5の内容を指示語「それ」で取り込むことで、文5と一体となって解答を形成している。

一方、(8)では、文41から「なぜ貴重な水分を排出してしまうのか」という疑問を想定できる。この疑問は先行文脈と文41の内容の食い違いから呼び起こされるものである。具体的に言うと、前の文39・40ではクジラが水分を失わないような環境と体の仕組みを持っていることが述べられており、それと「排泄で水分が失われる」ことが内容的に対立しているということである。ここで生じた疑問に対し、文42において排尿が塩分の排出によって間接的に体の水分の保持に役立っていることが示されることで、疑問の

解答とされているとの解釈ができる。

4.2 区切り目と認識されなかった「のだ」文の出現環境

今度は逆に、区切り目の認識を読み手に与えなかった「のだ」文（計7カ所）がいかなる環境で出現しているかを確認していく。これと、先に述べた区切り目と認識された「のだ」文の出現環境が互いに排他的であれば、ここまでの分析を補強するものとなる。これらの「のだ」文の出現環境は以下の2つのタイプがある。

Ⅲ 「のだ」文は先行文脈で提起された疑問の解答ではあるが、後続文にも解答が続いている（文17・24・29・30・37）

Ⅳ 「のだ」文が解答と解釈されるような疑問が先行文脈で提示されない（文32・34）

4.2.1 「のだ」文の後続文にも解答が続いている場合

この場合、「のだ」文は先行文脈にある疑問（もしくは先行文脈から想起された疑問）の解答ではあるが、「のだ」文に後続する文と合わさって1つの解答を構成しているとみなされる。まず、文24についてこのことを確認する。ここでは「のだ」文は解答を提示してはいるが、解答はここで完結せず、後続文へと最終的な解答を持ち越している。

- (9) 21. 乾燥地帯にすむインパラやガゼルなどのウシ科のほ乳類は、食物にする植物にふくまれている水分を利用して生活している。
22. ところが残念なことに、クジラの場合はこの方法は使えない。
[疑問：なぜ他の動物はつかえるのにクジラは使えないのか？]
23. それは、食物にふくまれる塩分の濃度が、植物とプランクトンなどとは違うからである。
24. クジラの食物となるプランクトンやイカなどの体液は、塩分の濃度が海水と同じなのである。
25. だから、これを利用すると、かえってのどがかわいてしまう。

文22から想起される「なぜ使えないのか」という疑問の解答は直後の文23から開始されているが、「のだ」文である文24ではまだ不完全で、文25を述べてようやく完全なものとなる。これは文23・24・25を解答として一つの文にまとめた(10)が成立することからもわかる。

- (10) 体液の塩分濃度が海水と同じプランクトンやイカなどは（文24）、植物とは異なり（文23）、利用するとかえってのどがかわいてしまう（文25）のだ。

また、以下の文37も文36から想起された疑問「クジラの体はどのようになっている

のか」に「できるだけ余分な水分を失わないようになっている」という一応の解答を与えた後、陸上の動物の場合と対比しながら残りの解答を提示している。4.1.1 節で先に紹介した例(5)の文17も、これと同様の例である。

- (11) 36. しかし、[注：クジラの体に] いくら脂肪が多いからといっても、あり余るほどの水ができるわけではない。
[疑問：クジラの体はどのようになっているのか]
37. この貴重な水分を有効に使うため、クジラの体はできるだけ余分な水分を失わないようになっているのである。
38. 陸上の動物の場合、体の水分が失われる大きな要因としては、呼吸・発汗・排せつの三つがある。
39. だが、海洋では水蒸気が比較的多く、湿度が非常に高いので、呼吸によって失われる水分の量はきわめて少ない。
40. また、クジラには汗腺がないため、汗によって水分が失われることはない。

ここまでに見てきた例はすべて、先行文脈に読み手に疑問を持たせるような表現があり、「のだ」文はそれに対する解答（もしくは解答の一部）であると一般化することができる。その中で、「のだ」文で解答が完成するものは区切り目と認識され、「のだ」文では解答が完成せず後続の文で解答の提示が終わるものは区切り目と認識されなかったと言える。

しかし、これには例外がないわけではない。今回の調査結果には以下のような例外が1つ存在した。

- (11) 27. そう（筆者注：食物の水分が利用できないと）なると残された道はただ一つ、クジラが自らの体内で水を作るということになる。
[疑問：クジラはどうやって水をつくるのか]
28. 一般に動物が食物を食べ、エネルギーを得る時には、脂肪や炭水化物やタンパク質が分解される。
29. その時、水ができるのだ。
30. クジラはこの水を利用するのである。
31. 特に脂肪が（動物の）体内で分解される時には、炭水化物やタンパク質に比べ、多くの水が生まれてくる。

この部分には文29・30と2つの「のだ」文が含まれている。ここでは先行文脈で「のだ」文と対応する疑問「どうやって水をつくるのか」が暗示されているにもかかわらず、文29は内容的な区切り目と認識されてはいない。ただ、ここでは後続の文30に「クジラはこの水を利用するのである」とあるため、これと合わせて疑問「クジラはどうやっ

て水を作るのか」に対応していると考えられる。したがって、文 29 は文 17・24・37 と同様に後続文に解答が続いているというふう処理できる。実際、文 28・29・30 は疑問への解答として以下のようにまとめられる。

- (12) クジラは脂肪や炭水化物が分解された（文 28）時にできた（文 29）水を利用する（文 30）のだ。

しかしながら、この文 30 も読み手には区切り目と認識されていない。その理由を考える手がかりとなるのが、後続の文 31 にある「特に」である。「特に」の後では先行文脈で導入された「脂肪や炭水化物やタンパク質」といった水の材料となる物質のうちから、「脂肪」のみを取り出して叙述が展開されている。つまり、この「特に」は、文 31 が先行文 30 に対して談話のレベルで従属しており、その影響下にあることを示している⁹。そして、この後は文 36 までしばらく「脂肪」のみに関する叙述が連続する。以上のことが影響して、文 29・30 では解答の提出が完成したという意識が読み手にそれほど十分に喚起されず、区切り目の認識が生まれなかったと思われる。

4.2.2 「のだ」文が解答と解釈されるような疑問が先行文脈で提示されない場合

区切り目と認識されなかった「のだ」文の出現環境のもう 1 つのタイプは、先行文脈に「のだ」文を解答とするような疑問が提示されておらず、また疑問を想起させるような叙述も存在しないようなケースである¹⁰。

- (13) 31. 特に脂肪が（動物の）体内で分解される時には、炭水化物やタンパク質に比べ、多くの水が生まれてくる。[疑問：？]
32. 幸運なことに、クジラは食物には多量の脂肪分がふくまれているのである。
33. また、クジラの体には、多くの脂肪が蓄えられている。[疑問：？]
34. だから、食物を口にしない時も、クジラはこの脂肪を分解して水を得ることができるのである。

ここでは文 32 と文 34 が「のだ」文となっているが、この文の内容が解答と解釈できるような疑問を先行文脈から想起することは難しい。もちろんあらゆる疑問の想起が不可能なわけではない。文 31 なら「なぜ脂肪は炭水化物やタンパク質より多くの水を生むのか」、文 22 なら「どうやって脂肪を蓄えているのか」などの疑問を想定することも可能であるが、それに対する解答が「のだ」文を後続文で与えられることはないというわけである。

文 32 は文 31 に対して補足的な情報、文 34 は文 33 から導かれる帰結という関係で先行文と結び付いていて、ここに「疑問—解答」の構造はみられない¹¹。また、これより

前の文脈に存在するどの文からも「のだ」文の内容に対応するような疑問を想起することは難しくなっている。

4.3 区切り目認識がもたらされる理由

ここまでみてきた「のだ」文の出現環境は以下の4タイプであった。

- I 「のだ」文が先行文脈に存在する疑問表現の解答になっている（区切り目）
- II 「のだ」文が先行文脈から想起される疑問の解答になっている（区切り目）
- III 「のだ」文は先行文脈で提起された疑問の解答ではあるが、後続文にも解答が続いている（非区切り目）
- IV 「のだ」文が解答と解釈されるような疑問が先行文脈で提示されない（非区切り目）

ここで鍵となる「疑問—解答」の構造は、会話分析における隣接発話ペア（adjacency pair）における典型的なユニット question-answer（「質問—回答」）と近似している¹²。したがって、「疑問—解答」で1つの単位、つまりここまでで内容が一区切りとなるという認識がテキストの読み手にもたらされていると考えられる。

上記の4分類は「のだ」文が「疑問—解答」構造をとるか否かという観点からは、以下の2つに再編成される。

- I II III 「のだ」文は疑問の解答（全部、もしくは一部）と解釈される
- IV 「のだ」文は疑問の解答とは解釈されない

I・II・IIIの場合は先にもみたように直前の文で提起された疑問のみならず、数文前の先行文脈にある疑問表現または先行文脈から想起可能な疑問に対する解答を与えるものであった。こちらは、解答に関係する複数の文を「疑問—解答」構造の内に取り込んでしまうという意味でテキストをグローバルに組織化する力を持っていると言える。一方、IVの場合は、今回の調査の限りではすべて直前の文とのみ直接的な関係を取り結んでいるものであった。よって、こちらは相対的にみてテキストをローカルに組織化していると言えるであろう。

5 「のだ」文のテキスト構成への貢献 —「からだ」との比較—

I・II・IIIのタイプにみられる「疑問—解答」の構造は、「のだ」文とその先行文脈の間に特有のものではなく、「のだ」と同様に説明のモダリティとされている「からだ」の文においても指摘できる。しかし、「からだ」の場合は、段落末・文章末で頻繁にもちいられるという「のだ」にみられる指摘は皆無である。それは「のだ」と「からだ」のテ

クストをまとめあげる力の差に起因している。

まず、両者が同じように「疑問—解答」の構造を作ることを確認する。以下の2例はともに先行文から想起された疑問に対し、「のだ」「からだ」の文が解答を与えているものである。

(15) ネズミは、夜陰に乗じて活動する動物である。

[疑問：なぜ夜陰に乗じて活動するのか]

- a. ネズミにとっては、明るい昼間より、夜に活動するほうが安全だからである。(動物)
- b. ネズミにとっては、明るい昼間より、夜に活動するほうが安全なのである。

(16) 実はフロンは大発明でした。[疑問：なぜ大発明と言えるのか]

- a. 工場で半導体をきれいにするためや冷蔵庫の冷媒として、フロンほど性能がよくて安いものはなかったからです。(地球)
- b. 工場で半導体をきれいにするためや冷蔵庫の冷媒として、フロンほど性能がよくて安いものはなかったのです。

しかし、テキストにおいて「からだ」の使用にはいくつかの制限がある。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのタイプの分析でみたように「のだ」は疑問と解答が必ずしも隣接している必要のないのに対し、「からだ」のほうは疑問の提出がかならず直前の文でなされなければならない¹³。

(17) ネズミは、夜陰に乗じて活動する動物である。

確かに、人間の睡眠時間帯からするとこれは不思議なことである。

- a. しかし、ネズミにとっては、明るい昼間より、夜に活動するほうが安全なのである。
- b. ??しかし、ネズミにとっては、明るい昼間より、夜に活動するほうが安全だからである。

(18) 実はフロンは大発明でした。

触っても吸い込んでも人体に悪影響を与えることがないと絶賛されました。

- a. そして、工場で半導体をきれいにするためや冷蔵庫の冷媒として、フロンほど性能がよくて安いものはなかったのです。
- b. ??そして、工場で半導体をきれいにするためや冷蔵庫の冷媒として、フロンほど性能がよくて安いものはなかったからです。

このことから、「からだ」に比べ「のだ」の方がよりグローバルなレベルでテキストの結束性に貢献しているということが示唆される。言い換えれば、「のだ」文は解答に関係する内容であれば、先行する疑問との間にそれらを取り込み、内容的に完結性・統一性のあるユニットを形成する力を潜在的に持っているのである。

6 おわりに

本稿ではなぜ「のだ」文がテキストの読み手に区切り目の認識をもたらすのかについて実験的な調査の結果にもとづいて考察をした。調査の結果から「のだ」文が先行文脈で提示された疑問の解答と解釈される場合に読み手に区切り目の認識をもたらす傾向があることが確認された。また、同じ「課題—解答」構造を形成する「からだ」との比較により「のだ」がテキストをグローバルに組織化し、複数の文をさまざまな大きさのユニットにまとめ上げる力を持つことを指摘した。

もちろん、この考察はただ1篇のテキストについての調査にもとづくものであって、その意味で限界があることは言うまでもない。今回の調査は説明的なテキストを材料にしたが、文章の構造やジャンルが異なれば、他の要因が区切り目の認識に影響を与えることは否定できない。今後は別のテキストでも同様の傾向が観察されるかどうかを確認する必要があるだろう。またⅣのタイプの「のだ」文の特徴についても詳しく論ずることができなかった。今後の課題としたい。

注

- 1 ここでは「のだ」「のである」「のです」など文体的な変異形をすべてを「のだ」で代表して示す。
- 2 林 (1964) 霜崎 (1981)、マクグロイン (1984) 今村 (1996) などを参照。
- 3 清水 (1997) は「は」による主題省略が続いている環境で「のだ」文が出現した場合、その次の文では原則的に主題が省略しにくいことから「のだ」が境界設定の役割を果たしているとして述べている。これは「のだ」がテキストにおいて内容的な区切り目としてはたらいっていることの間接的なあらわれであると捉えることが可能である。
- 4 読み手の段落区分と原文の改行一字下げによる書き手の段落区分との不一致は、牧野 (1978)、佐久間 (1984) による読み手の段落意識に関する実験でも確認されている。
- 5 被験者は全員が筑波大学に在学する文系の大学生・大学院生で、日本語を母語とするものである。
- 6 文 44 はテキストの最後尾の文である。後続する文がないので、必然的に内容的な区切り目となるはずであるが、調査ではこの後に区切り目を記入した被験者はいなかった。これは「後続文がないのでこさら区切る必要がない」との意識がはたらいた可能性がある。説明の煩雑さを避けるために文 44 は以降の分析の対象から除外するが、文 44 は文 43 の叙述から想起された疑問への解答を提示するものであり本稿の分類のタイプⅡに該当することを付け加えておく。
- 7 前掲の石黒 (2004) では、新聞のコラムを題材に一篇の文章に含まれる全ての文について文末に「のだ」が必要かどうかを読み手に答えてもらう調査を行い、先に述べた考えにもとづいて調査結果の分析を試みている。この分析の記述から、石黒も明示的な疑問文の解答を提出する場合に「のだ」文が用いられやすいと考えていることが推測されるが、特に一般化はされていない。また、この分析には、段落の終わりや話題の変更前に「のだ」が用いられやすいとしているなど異なるレベルでの説明も混在している。ただし、これは石黒 (2004) が表現技術指導の立場から著されたものであるため、直観

的に理解しやすい説明を第一に考えているからではないかと思われる。

- 8 先行文脈の叙述から疑問が想起されると考えることは、益岡(1991)が「のだ」による説明の本質としている「課題設定」と通じるところがある。「課題設定」においても、「なぜ……」といった課題を仮定するが、その導出される先が先行文となっている。ただし、益岡は本稿とは異なり、言語的文脈が存在する場合は直前の文からのみ課題が導出されると捉えているようである。
- 9 類義の表現「とりわけ」や、注釈をあらわす「なお」「ちなみに」なども同様のはたらきをもつと予想される。
- 10 「疑問—解答」構造をとらない「のだ」文には、これ以外に「つまり」などと呼応してそこまでの内容をまとめたり、言い換えたりするものが存在する。この種の「のだ」文も内容の区切り目となる可能性は十分にあるが、今回の調査テキストでは確認できなかったため、ここでは扱わなかった。
- 11 従来の「のだ」の研究では、「のだ」文と先行文との意味関係は主要なトピックの1つであった。例えば、その意味関係の詳細な分類を行ったり、先行文との間に特定の意味関係が読み取れるかどうかを「のだ」分類の基準として設けたりということが多くの研究で行なわれてきた。しかし、直前の先行文と特定の意味関係を結んでいる以外に、本稿でみたように、教文先の文と「疑問—解答」のような意味関係を結んでいる場合があることにも注意を向ける必要がある。一方で、この「のだ」文と先行文(脈)との2種類の関係性は、必ずしも同次元で論じられるものではないと考えるが、まだここでは詳しく述べる用意がない。
- 12 隣接発話ペアの典型例としては、この他に、greeting-greeting(「挨拶—挨拶」)、offer-acceptance/refusal(「要求—許可/拒否」)などがある。
- 13 久野(1974)は「のだ」と「からだ」の違いについて、前者が説明しようとする事象は先行文として言語化されていなくてもよいのに対し、後者が説明しようとする事象は言語化された文で、そのままの形で「からだ」構文の主語になり得るものでなければならないとしている。これは本稿で指摘したことと同根の問題であると考えられる。(例文は原文でのカタカナ表記をひらがなに変更してある)
 - ・体重が10ポンド減りました。病氣だからです。
 - ・体重が10ポンド減ったのは、病氣だからです。

参考文献

- 石黒 圭 (2004)『よくわかる文章表現の技術Ⅰ 表現・表記編』明治書院
- 今村和宏 (1996)「論述文における『のだ』文のさじ加減—上級日本語学習者に文の調子を伝える試み—」『言語文化』33 一橋大学語学研究室
- 久野 暉 (1974)『日本文法研究』大修館書店
- 佐久間まゆみ (1983)「読み手の段落区分と文章の構造原理」『月刊言語』13-3 大修館書店
- 清水佳子 (1997)「主題連鎖と『のだ』との関連」『現代日本語研究』4 大阪大学現代日本語学講座
- 霜崎 實 (1981)「[ノデアル] 考—テキストにおける結束性の考察—」『Sophia Linguistica』7 上智大学大学院言語学研究室
- 田野村忠温 (1991)『現代日本語の文法Ⅰ 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 塚原鉄雄 (1966)「修辭的段落と論理的段落」『表現研究』4 表現学会
- 永野 賢 (1986)『文章論総説』朝倉書店
- 二通信子・佐藤不二子 (2001)『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 野田春美 (1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 林大「ダとナノダ」森岡健二他編『講座現代語6 口語文法の問題点』明治書院
- 牧野成一 (1978)『ことばと空間』東海大学出版会
- 益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- マクグロイン・H・直美 (1984)「談話・文章における『のです』の機能」『月刊言語』13-1 大衆館書店

用例出典

(現代) 鎌田慧『新版 現代社会 100 面相』岩波ジュニア新書

(動物) 加藤由子『動物の睡眠と暮らし』『中学国語 伝えあう言葉 1』教育出版

(地球) 島村英紀『かけがえのない地球』『中学国語 伝えあう言葉 1』教育出版

資料 1

クジラの飲み水

(大隈清治著 『現代の国語 1』三省堂所収)

1. 「海には水が不足している。」と言ったら、ほとんどの人はそんなことがあるわけがないと思うだろう。
2. もちろん海水の大部分は水であるし、海が大きな水のかたまりであることは確かである。
3. しかし、膨大な水によって作られている海は、人間の飲み水という面からみると、砂漠と同じかそれ以上に水が乏しい環境なのである。
4. 海にすむほ乳類であるクジラにとって、飲み水をどのようにして得るかということは非常に大きな問題となる。
5. 動物はふつう、体重の約七〇パーセントが水分であり、そのうちの一〇パーセントの水分を失うと生命がおびやかされる。
6. 生物にとって水はそれほどたいせつなものなのである。
7. それでは、いったいクジラはどのようにして飲み水を得ているのであろうか。
8. まず第一に考えられるのは、クジラは海水から水を得ることができるのではないかということだ。
9. 人間などの陸にすむほ乳類の体液には、わずかな塩分がふくまれているが、海水に比べるとその濃度ははるかに低い。
10. だから、もし海水を飲むと、逆にのどがかわいてしまう。
11. 海で遭難してのどがかわいた時に、決して海水を飲んではいけないといわれるのはこのためである。
12. では、クジラは海での生活に適応したため、塩分の濃い海水を飲むことができるようになったのだろうか。
13. たしかにクジラの体は、海という環境に適応していろいろな変化をしたが、海水を淡水に変えるような体の働きは備わっていない。
14. つまり、飲み水に関しては陸にすむほ乳類とほとんど変わらない。
15. このため、クジラも海水を飲んでのどのかわきをいやすことはできないのである。
16. それでは、食物を食べる時にいっしょに飲み込まれる海水は平気なのか、という疑問を持つ人もいようだろう。
17. ところが、食物を食べる時には、海水はほとんど胃の中に入ることはないのである。
18. 例えば、シロナガスクジラの場合は、口の中にあるヒゲのような器官を使って、口を閉じたまま海水だけをヒゲのすき間から外に流し出してしまおうのだ。
19. 第二に考えられるのは、クジラの食物である生物の体の中にくまられる水分を利用しているのはいいか、ということである。
20. クジラの食物となるプランクトンや魚介類の体の八〇パーセント近くは水でできており、これを利用するわけである。
21. 乾燥地帯にすむインパラやガゼルなどのウシ科のほ乳類は、食物にする植物にふくまれている水分を利用して生活している。
22. ところが残念なことに、クジラの場合はこの方法は使えない。
23. それは、食物にふくまれる塩分の濃度が、植物とプランクトンなどとは違うからである。
24. クジラの食物となるプランクトンやイカなどの体液は、塩分の濃度が海水と同じなのである。
25. だから、これを利用すると、かえってのどがかわいてしまう。
26. クジラは、口の中やのどで食物をぎゅっとしぼってから胃に送り、塩分をとりすぎないようにしている。

27. そうなると残された道はただ一つ、クジラが自らの体内で水を作るということになる。
28. 一般に動物が食物を食べ、エネルギーを得る時には、脂肪や炭水化物やタンパク質が分解される。
29. その時、水ができるのだ。
30. クジラはこの水を利用するのである。
31. 特に脂肪が体内で分解される時には、炭水化物やタンパク質に比べ、多くの水が生まれてくる。
32. 幸運なことに、クジラの食物には多量の脂肪分がふくまれているのである。
33. また、クジラの体には、多くの脂肪が蓄えられている。
34. だから、食物を口にしない時も、クジラはこの脂肪を分解して水を得ることができるのである。
35. 砂漠にいるラクダも、こぶに脂肪をため、長時間水を飲まずに暮らしているといわれている。
36. しかし、いくら脂肪が多いからといっても、あり余るほどの水ができるわけではない。
37. この貴重な水分を有効に使うため、クジラの体はできるだけ余分な水分を失わないようになっているのである。
38. 陸上の動物の場合、体の水分が失われる大きな要因としては、呼吸・発汗・排せつの三つがある。
39. だが、海洋では水蒸気が比較的多く、湿度が非常に高いので、呼吸によって失われる水分の量はきわめて少ない。
40. また、クジラには汗腺がないため、汗によって水分が失われることはない。
41. したがって、クジラの場合、貴重な水分は主に排せつによって失われることになる。
42. これはもったいない話のように思えるけれども、尿を出すことは、同時に体内の余分な塩分を、老廃物といっしょに排出することになっているのである。
43. このように、砂漠よりも水の乏しい環境にすむクジラは、飲み水としての水を飲むことが全くない。
44. クジラは体内で水を作り、尿によって塩分を排出し、一方でできるだけ、呼吸や汗で水分を失わないようにして暮らしているのである。

資料 2

文章理解についての調査にご協力をお願いします。調査は記入式です。下にある指示に従って、調査用紙に直接記入していただきます。

1. まず調査用紙の1～2ページにある文章「クジラの飲み水」を最初から最後まで通して読んで下さい。
2. その後、内容のまとまりごとに線をひいて区切ってください
線は文と文の間に引いてください

- 例) ①昔々おじいさんとおばあさんがいました。
 ②おじいさんは山へ芝刈りに行きました。
 ③おばあさんは川へ洗濯に行きました。

線は何本ひいてもかまいません

一つの文だけで一つの内容のまとまりになっていると思えば、文一つだけのまとまりをつくってもかまいません。

(たわらやま ゆうじ 筑波大学大学院博士課程
 人文社会科学研究所 応用言語学)